

国安天満神社の秋祭り

金子 直樹

一 名称について

一九三八年発行の『兵庫県神社誌 中巻』によると、「郷社 天満神社」の祭日として「春祭」「夏祭」「例祭」一九八二年発行の『稲美町史』では「天満神社」の祭日として「春祭並びに祈年祭」「夏祭湯立神事」「秋祭（例祭） 神輿渡御」と記されている。よって、定期的に秋祭りだが、正式には例祭とも呼ばれるものである。祭礼に参加する氏子には祭り、あるいは秋祭りと呼称されているが、関係文書には「平成三十年国安天満神社秋祭り」などと表記されている。

また神社の名称も、神社誌や町史にあるように、正式には天満神社であるが、一般的には鎮座地を付与した国安天満神社と呼称・表記されている。ただし国立公文書館所蔵の一七〇二年（元禄一五）と一八三八年（天保九）の「播磨国絵図」では、国安村に隣接して社殿が描かれ「天神」と記されている。兵庫県神社誌に所収されている一七四三年（寛保三）寺社明細帳では「池大明神 天満天神 辨財天」、一七六〇年（宝暦一〇）寺社明細帳では「池大明神 天満天神 辨財天」とともに「氏神天神」「氏宮天神」と記されており、社名については一様ではない。これらのことから、天満神社の名称は、後述する神仏分離が行われ、郷社の社格に列せられた明治初期以降に定着したと考えられる。

一方、池大明神は「大年神」として祭祀されているが、隣接する天満大池に関連するものと想定される。天満大池は周辺のため池で最古の歴史を有し、構築時期は白鳳時代と伝えられ、天満神社の祭神である菅原道真の時代より二〇〇年以上さかのぼる。慶長末期頃に作成

されたと思われる「慶長播磨国絵図」では、国安村に隣接して禄期や天保期の国絵図のような社殿ではなく、池が描かれ「大池」とだけ記されている（『加古川市史』）。この状況から、天満大池という名称も神社の名称と同様に後世になって命名されたものと推測される。

二 実施期間・実施場所

国安天満神社の秋祭りは、現在では一〇月第二土曜日に「宵宮」翌日曜日に「昼宮」と実施されているが、過去には若干の変遷があった。前出の神社誌・町史および聞き取り、祭礼の構成などを総合すると、一九〇八年（明治四一）までは太陰暦（旧暦）の九月八日・九日、翌一九〇九年（明治四二）から太陽暦（新暦）一〇月一四日・一五日、体育の日が制定された一九六四年（昭和三九）から一〇月九日・一〇日以降は、現在の日程に変更され二〇〇〇年（平成十二）

祭礼は神社に屋台などともに氏子

が参詣し、祭儀を行う一方、舞殿

での獅子舞奉納や屋台の練りなどが

行われる一方、昼宮の午後から神

輿を中心にした渡御が実施される。

これは「みそぎ渡御」とも呼ばれ、

神輿を天満大池に投げ入れること三

回行ってから、行列が御旅所に進む。

国安天満は天満大池の北西端に鎮座

するが、御旅所は南西端に位置する

（稲美町六分一船引）。ここは六分一地区の東端にあたり、神輿を安



写真1 御旅所での神事

置するための石造の台座が設置されている

他、一三五六（延文元）の銘がある地藏菩薩が祭祀されている堂がある。国安天満神社の由緒（兵庫県神社誌・稲美町史）によれば、同社は六五三年（白雉四）創建されたが、場所は今より東側の場所（岡東公民館周辺）で、現在地は御旅所であった。その後八九三年（寛平五）に社殿が今の場所に移され、御旅所も新しく船引に設定されたという。

三 国安天満神社の秋祭りの特色

① 神輿の投げ入れ

国安天満神社の秋祭りで特筆されるのは、御旅所への渡御の際に神輿が隣接する天満大池に投げ入れる点である。これは現在「みそぎ渡御」や「みそぎ行事」などとも呼ばれているが、兵庫県神社誌では「渡御の途中大池に神輿を三四回浮沈せしむ」、「此の大池は天満村大部分の用水溜にて満水保願の信仰により之を行ふ」とし、稲美町史ではこれに加えて「五穀豊穡を願う」とも記している。



写真2 天満大池に投げ込まれた神輿御旅所での神事

神輿はこれに備えるために、渡御直前に担ぎ棒とともに神輿全体に縄が締められ、屋根の鳳凰の飾りもあえて外される。池には現在三回投げ入れられるが、神輿は一回投げ入れられる前に社殿を右回りに三周する。三周する間に神輿をひっくり返すような所作が何度も行われる。こうした状況により、しばしば神輿の損傷が発生し、毎年修繕が必要になると

いう。

また池の水位が深すぎると一緒に池に飛び込む担ぎ手が危険なため、近年では事前に池の水を多少抜くなどして水位を調整しているという。結果として、神輿を投げ入れる池の堤体上の道路上から水面まで3m前後の落差となっており、大変荒々しく所作に感じられる。ただし、かつては池の堤体自体が今より低くなっており（拝殿に掲示されている写真から1m程度の落差と推定）、神輿を現在のようには放り投げなかったようである。それが昭和三〇年代後半に道路を拡幅した際に、堤体自体を盛土・強化した結果、水面と大きな段差が発生したため、現在のように放り込む形になったという。

② 屋台

神輿の投げ入れの一方、祭りには播磨各地と同様に屋台（屋台太鼓とも呼称）が登場し、また獅子舞も奉納される。先行研究等により、稲美町や周辺の播磨町・明石市・三木市域などでは、祭礼に平屋根の布団屋根型の昇く屋台が登場する一方、隣接する加古川市域では、これに加えて、反り屋根の布団屋根型屋台や姫路市方面で一般的な神輿屋根型

表1 国安天満神社秋祭りにおける当番地区ごとの状況（平成30年度）

当番地区	平成30年度	地区	「子供神輿」	屋台	獅子舞	宵宮宮入	昼宮宮入
1	国安	当番			有	実施	実施
2	岡	岡西	布団屋根型屋台	布団屋根型	有	実施	実施
		岡東	有		有		実施
		十七丁	有		有		実施
3	蛸草	出新田				実施	
4	国岡		神輿屋根型屋台	神輿屋根型	有	実施	実施
5	北山		有		有	実施	
6	向山					実施	
7	下沢					実施	
8	中一色					実施	
9	幸竹						
10	中村		有			実施	
11	森安					実施	
12	六分一			唐破風屋根型屋台	有	実施	実施



写真3 岡西地区の布団屋根型屋台

屋台などが混在しているとされる。表1に示した通り、現在の国安天満神社の秋祭りには、氏子一二地区のうち、岡西地区に平屋根の布団屋根型屋台、国岡地区に神輿屋根型屋台、さらに六分一地区には近年に導入された唐破風屋根の屋台が一台存在し、やはり混在した状態となっている（子供神輿とされるものにも岡西地区では布団屋根型屋台、国岡地区では神輿屋根型屋台となっている）。



写真4 国岡地区の神輿屋根型屋台



写真5 六分一地区の唐破風屋根型屋

一方、国安天満神社には江戸後期の頃を描いたものと思われる「例年九月九日祭礼神事順」と記された祭礼図絵巻が所蔵されている（『東播磨の文化財』）。ここには御旅所への祭礼行列が描かれているが、屋台的なものとして、車輪で曳く「御先太鼓」と記された屋台（国岡新村Ⅱ現・国岡）があり、後に「やつさ太鼓」と記された屋台七台が続くが、このうち屋根が薄い平屋根の布団屋根型屋台が五台（岡村東・岡村西・六分一村・北山村・国安村）、唐破風屋根の屋台が二台（ただしこれも菱形で布団屋根のように修正が加えられている、森安村・中一色村）描かれている。また江戸期まで同社の別当寺であった円光寺が所蔵する一八六四年（元治元年）の「祭禮神式之絵図」には、神社境内に一二台の



写真6 御先太鼓（国安天満神社蔵 祭礼図 絵巻「例年九月九日祭礼神事順」）



写真7 やつさ太鼓1（国安天満神社蔵 祭礼図 絵巻「例年九月九日祭礼神事順」）



写真8 やつさ太鼓2（国安天満神社蔵 祭礼図 絵巻「例年九月九日祭礼神事順」）

屋台が描かれているが、こちらは現在に近い三段の平屋根の布団屋根型屋台となっている。これらは、江戸期における屋台の形態的变化をうかがわせる一方、すでに平屋根布団屋根の屋台が中心であったことを示唆している。

しかし現在の屋台は、記録や聞き取りによると多くは平成以降に導入されたものという。稲美町史には「屋台の方はすでに明治の末に近い頃、日露戦後の経営上費用節減のために、天満神社も住吉神社も八幡神社もすべて廃止され、わずかに一台くらいが残っているとところがあるに過ぎない」と記されている。聞き取りによれば、昭和初期まで屋台が多数存在したものの、第二次大戦後に衰退し、岡西地区の屋台のみが残存したという。よって稲美町域では、岡西地区のものを除けば四〇年前には屋台はほとんど失われていたものが、平成に入ってから徐々に復活が図られてきたことになる。布団屋根以外の屋台が存在するのも、こうした経緯によるものである。ただし国安天満神社の秋祭りに出される屋台は、基本的に昇くものであるが、すべてに車輪が装着されており、神社境内で練る際に車輪が外される。

③獅子舞

播磨地方では、様々な祭礼・行事の際に獅子舞が多く演じられる。大半は伊勢大神楽の影響で江戸期に広まったと考えられるが稲美町史では「この地域における獅子舞がいつ頃から始まったものか明らかに分らない」としつつも「百数十年以上二百年くらい前から」としている。また「どこから伝わったかについては、印南の東地区の神出町紫合（現・神戸市西区神出町紫合）の地域からであろうと想像されている」と記しているが、紫合にある池下大歳神社では「稲美町印南より伝承したと伝えられている獅子舞」とおよそ真逆に伝えられている（兵庫県神社庁HP）。

獅子舞の起源については不明瞭である

が、前出の祭礼図絵巻には岡村と蛸草新村の獅子頭を収納する祠が獅子神楽」として描かれており、江戸後期にはこの二地区において獅子舞が行われていたと思われる。稲美町史には「国安・岡西・十七丁・蛸草・国岡」の五地区、現在ではこれに岡東・北山・六分一の三地区が加わり、八地区で獅子舞が行われている。



写真9 獅子神楽（国安天満神社蔵 祭礼図
絵巻「例年九月九日祭礼神事順」）

獅子舞を行う地区の中には、途中で中断したものや復活したものもあるかと思われるが、全体として屋台ほどは衰微せずに現在に至っている。例えば六分一地区では、近年まで獅子舞や屋台を持っていなかったが、高砂市出身の住民が中心となって、姫路市の大塩天満宮祭礼に登場する頭から尾まで黒い毛におおわれた毛獅子に類似した獅子舞を創設している（同様に姫路市域の一部で見られるダンジリに近い唐破風屋根型の屋台も導入）。これには獅子舞の道具類が屋台に比べて安価で入手可能で、

かつ近年では行政の地域活性化関連事業の補助金を受けやすい背景があるという。現在では各地区とも保存会を組織し、一〇〇代を中心としたその伝承活動が行われている。国岡天満神社の秋祭りでは、昼宮の午前中に二〇一四年（平成二六）に再建された神楽殿で地区ごとに獅子舞が奉納される他、午後の渡御行列にも参加し、御旅所でも舞を行っている。

四 国安天満神社の秋祭りの歴史と概要

兵庫県神社誌にある縁起によれば、国安天満神社は六五三年（白雉四）創建とされるが、この時は王子権現という錫杖地藏を勧請したものであった。その後、九〇一年（延喜元）に菅原道真が太宰府に左遷された際「二見の宮地」に上陸し、当社にも立寄り休憩したが、彼の死後京都北野に天満宮が創建されてから、上記の縁により道真を勧請したとされている。縁起はその年号を記載していないが、北野天満宮は九四七年（天暦元）に社殿が造営され、九八七年（永延元）に初の勅祭が行われ、「北野天満宮天神」の勅号を受けている。よって、国安天満神社でも神社創建から三〇〇年以上後に菅原道真が祭祀されたと考えられる。

なお同社には、室町末期から江戸初期に作られたと推定されている掛け軸「天神曼荼羅」が所蔵されている（稲美町指定文化財）。稲美町史によれば、これは一八五四年（安政元）に二見（現・明石市二見町）にあった菅相院から、別当であった円光寺に贈られたものであるという。

一方、祭礼については兵庫県神社誌の記載（実施日や神輿を池に浮

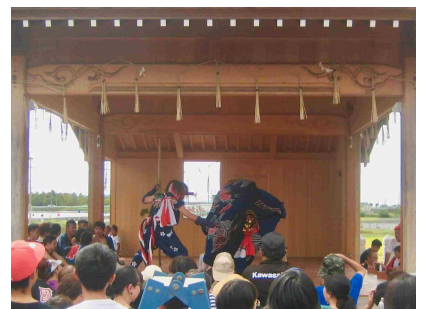


写真10 獅子舞の奉納（天満神社境内神楽

沈されること等)、神社所蔵の祭礼図絵巻(例年九月九日祭礼神事順)、別当寺であった円光寺所蔵の一八六四年(元治元年)「祭禮神式之絵図」から江戸期の状況をうかがうことができる。それらから、当時の祭礼(秋祭り)は基本的に現在と同様の構成であったと推定される。すなわち、祭礼日には氏子が地区ごとに屋台を昇きながら参詣する。境内では獅子舞が奉納され、拝殿では総代らにより祭儀が執行される。その後、蔵から神輿が出され、御神体を遷移させた後、御旅所までの渡御を行うが、その途上で前述した「みそぎ渡御」が行われる。

表2は祭礼図絵巻に描かれた江戸後期の渡御行列を列記したものである。櫛・金幣・長持・弓など現在の渡御でも存在するものがある一方、毛槍・提灯・鉾などは現在では確認できない。また大きな相違点として、江戸期では「御先太鼓」や「やつさ太鼓」と記された屋台が渡御に参加しているが、現在では渡御には参加せず、同時刻に神社境内で「練り」を行っている。前述した屋台が明治末期、あるいは第二次大戦後に衰微した状況が、この変化に影響したとも推測される。これに対して、神輿については「御神輿拾六人」と記され、後述する「十六人方」によって担がれている点に変化はない。

また絵巻には、「別當寺」と記された籠も描かれているが、これは神社の別當寺の円光寺の僧侶が乗っていたものと思われる。円光寺は七四三年(天平五)創建とされる真言宗寺院で、江戸期には国安天満神社の別當寺であった。当初は国安天満神社より一〇〇m北の八坂神社東隣にあったものが、一七八九年から明治初年頃まで現在の神社社務所の位置に移転し、その後、神仏分離令により神社とは分離され、国安地区に隣接する中村地区に移転している。この結果、国安天満神社は「神官によつて差配される」(稲美町史)ことになり、一八七四年(明治七)には

新たに造られた社格制度の中で、郷社に列せられた。こうした変化により、渡御には別當寺に代わつて神社の神職が参加するようになった。

五 国安天満神社の秋祭りに関する組織

国安天満神社秋祭りは、神社関係者および氏子代表の宮総代、神社周辺地区の自治会代表者が中心となり、周辺一二の地区で執行されている。氏子総代・自治会代表者は、各地区が一名選出され合計二四名からなり、拝殿や社務所での祭儀・直会は彼らが参加する。氏子の地区について、前出の神社誌所収の一七六〇年(宝暦十)寺社明細帳では一〇地区となっており、周辺地域の人口増加や社会変化に対応して増加してきたようである。

これら地区のうち、毎年「当番村」と呼ばれる地区が中心となり、特に「みそぎ渡御」で天満大池に投げ入れる神輿を担ぐ「十六人方」を始め、渡御を中心に宮総代らとともに祭礼の準備や運営を行う。地区の年配者二名が「トウニン」と呼ばれる総責任者となり、渡御行列の先頭を櫛や御幣を持つて歩く。前出の祭礼図絵巻では「頭人 白衣狩衣 烏帽子中啓持」と記載されるが、特別な存在であることを感じさせる。神輿は池に投げ入れられたり、境内でひっくり返される激しい所作も行われるため、しばしば破損し、毎年のように修理されるが、この費用は当番村が負担するという。当番は一年一地区で、現在は一二年に一回担当する。ただし祭礼の円滑化や安全を図る「警備」役は、翌年の当番予定の地区が担当する。

表2 国安天満神社祭礼図絵巻に描かれた江戸後期における渡御行列

(猿田彦)・御先太鼓(曳く屋台)・(猿田彦)・獅子神楽(獅子舞)・花笠子供・やつさ太鼓(昇く屋台)・杖拂・物菰・神輿台・御膳長持・提燈・幟・毛槍・台笠・立傘・弓・杖拂・□□・別當寺(圓光寺)※・太刀・長刀・太鼓・頭人・白幣・櫛・金幣・鉾・猿田彦・警護・神輿(十六人方)
--

下線部は現在の渡御にも参加 ※現在は国安天満神社神職が参加

神輿担ぎの十六人方はこの祭りの中核的存在であり、当番地区から「大体二十歳から三十歳くらいの者十六人」が選ばれ、「他と区別していずれも赤鉢巻を締め、お旅所へ渡御の往復に奉仕」する（稲美町史）。十六人方を選ばれることは、この地域では名誉なこととされ、かつては家の長男などに限定していた地区もあったという。現在ではこの世代の人口は少なく、こうした制約は存在しない。また神輿の重量が重いため、実際には一人より多く選出されているという。

一方、当番となる地区は自治会を基本単位とされるが、複数の自治会で一地区にまとまっている地区や、逆に当番村としては一地区であるが、祭礼時の宮入（参拝）や、これに付随する屋台や獅子舞などでは個別の自治会単位となっている地区も存在する（表1）。このため、当番村としては一二地区であるが、実際に宮入する地区は一となっている。このうち屋台については現在三地区が所有、獅子舞は八地区が行われているが、これらも宮入する地区ごとに保存会などが組織され、その維持にあたっている。

六 国安天満神社の秋祭りの内容

二〇一八年（平成三〇）の秋祭りの次第は以下の表3にあげた通りである。宮入する地区は一五地区であるが、前述のように屋台が出る地区や獅子舞が奉納される地区がある一方、氏子が宮入するだけの地区も存在する。また宮入りの順番も十六人方を除けば、明確に決まられておらず、およそ神社に到着した順となっている。渡御については、江戸期の絵巻で渡御行列に描かれていた屋台が、現在は参加せず、渡御の間に神社境内で練りを行っている。祭礼に参加する服装について、渡御に参加する御幣などを持つ宮総代の一部やトウニンは、江戸期に類似した白や

黒の和服に烏帽子の姿となっているが、他はそれぞれの地区ごと、あるいは宮総代の法被を着用している。

一九八二年発行の稲美町史で十六人方は「白シャツに白パンツの軽装」としているが、二〇一八年では当番地区「国安」の地名が入った専用の法被となっていた。聞き取りでも明確ではなかったが一九七〇年〜八〇年代に現在のように地区ごとの法被が定着したものと推測される。

七 参考文献等

稲美町史編集委員会編一九八二

『稲美町史』稲美町

加古川市史編さん専門委員編

一九八七『加古川市史5』加古川市

兵庫県神職会編一九三八

『兵庫県神社誌中巻』臨川書店

国立公文書館所蔵「播磨国絵図」一七〇二（元禄一五）

（国立公文書館デジタルアーカイブ）

国立公文書館所蔵「播磨国絵図」一八三八（天保九）

（国立公文書館デジタルアーカイブ）

加古川総合文化センター編 二〇〇七『東播磨の文化財』

加古川総合文化センター博物館図録17

表3 国安天満神社秋祭り次第（平成30年度）

祭礼	月日曜日	時間	行事	備考
宵宮	10月6日（土）	15:30～	子供神輿奉納	
		18:30～	屋台太鼓（岡西・国岡）宮入	境内警備開始
			各自治会の宮入	
		19:00～	屋台太鼓の練り	
		19:30	十六人方の宮入	
		22:00		境内警備終了
昼宮	10月7日（日）		初宮参り	
		8:30～	屋台太鼓（岡西・国岡）宮入	
			各自治会の宮入	
		9:15～	屋台太鼓の練り	
		10:00～	十六人方の宮入	境内警備開始
		10:15～	獅子舞奉納（岡西・国安・十七丁・蛸草・国岡・六分一・岡東・北山）	神楽殿
		11:00～	祭儀（氏子総代・自治会長ら参加）	社殿内
		12:15～	屋台太鼓の練り	
		12:30～	直会（氏子総代・自治会長ら参加）	社務所
		13:15～	渡御・禊神事準備（神輿を社殿に運ぶ）	
		13:45～	神輿の練り（社殿を3周、天満大池に投げ入れなど等）	禊渡御
		15:30～	渡御行列・御旅所での神事・獅子舞奉納	
		16:45～	屋台太鼓（岡西・国岡）宮入	
		17:00	渡御神社に戻り、神輿の練り	境内警備終了